



門
武
228
卷
4

瀛州志稿上卷



清衆錄卷四

人體篇

組識論第四

硬骨症

硬骨ハ身也、身尔ノ体中之内を坚核ありトシテ筋肉、諸骨
至トクレ連合を成モリセテ筋骨ニ云。連合至筋形ハ、多ガ筋
アテ筋節を有シ、筋も挖り様を以テ走れテ、皮肉の
硬骨を厚皮肉も神也依賴志、亦知覺の要焉を有セマ。筋
素の筋附を失し、血行の行焉を失キテ先呈筋と同ニ筋筋
肉ハあれあつきて、事職を以テ、血脳あきあ沿引て全
身ニ涉エ、神至あれをトシテ支體不臺連リテ、肩負り
堅硬ニ充て筋と骨とを互に、深力の筋弱ニ、筋業を多の度
序ニハ、合々筋筋をううせ、ねうそ乾枯されハ、まさハ減



至れりも取て密とハ是あらずと云々、されども在
る予ちも志の眞りをふれもて、手筋ぬことを筋ぬと合ひ
て、手筋を筋ぬハ萬事て消失するもとす筋ぬの爲り、
乞うれば、手筋を筋ぬとハ所謂骨立云もめりて、専を
さ切弱めは、散官も立さぬ半よ居る。杠年ハ三ふの二
又而是尤人ハハきめ七又ちふ。近蓋骨へす筋ぬを含む
予最多多く四支め長骨あれ。つゞく、軀骨ハ最望か
骨貯中より不存筋ぬハ硬ケキジムモ環ミヤ克ム。強力を存
在て透形す。軟骨子既至ふとせて、けよ高め軟骨中より
えを立ツツヘヒセ、造骨の軟骨ニ登云取次す筋ぬハ硬厚
め塙乾みて、ジアラニ、十九歳の男子の股骨と解きて、燐破
加筋臺ひ、燐破加筋臺正燐破甚ひ、燐骨塙をね石り。他
ハ造骨の軟骨之脂ニ水とあま也。大有筋ぬありがゆゑよ。

大氣と凡てして強力とも互し又は堅ゆつしるの體ゆ
之へども行ひ失ひわざ貯硬く一て砾ケヤモクに至
り金石と競立を能カにてわざうよ易貯を表し掌海ふま
と、焉ふニ多様物とあるく食りをあつゝさればあらぬ
ウヨウリノ調合にてされうゆえニ主テシヒテよ
リあれよ理へ掌に凌きてよ／＼あれニ主シ其ノ調和を表
トモハアトヨ通ヘビセキトモトモセキル也モケヨナシ云
ダニ因ムモ手詮子らヒヒ其ノ調和ハ次第ニ呈スルニ
至テヨテ昭晃小兒のはき造骨の軟骨とあるく食之ちん
ヨ以左写ニテシヒテ所くニ主獨物とあるモ年ニムリ
テハ有様物ノモ感して毫々墜ルモ貯ハ失せてぢ
を玉ふを碎ケツ玉を掌傷のあらよゑ死ゆるもちあ玉骨
と水もてられバ有様物を水申引出せんかし臺中

よて焼けを脱ぐれよ化あてす様物の筋にゆく筋よ
それを肩中の有様物ハ水と溶けて膠ともふせぬとよ
骨の兩端貪中にはし炭より効ひも先焼て色紅よ
以てこれを肩中は乞めあ般骨ハ安田毛重せ故ちて春華
し此へを骨格と互うて直立りとぞ涉るのみあれと骨
の化化電是とぞ云取ふ

克有者曰肩、肩骨とハ、形ち肩乎あるう故よあり名らる。右
にテ体肉要焉をももふは、以肩骨をもて、四圍を護
ル。又、胸籠めぬし、以肩内外の肩骨より至り。その間よ
ハ、肩ばりやり何事にて豆よ合と、内外の肩骨をあく
べし。また掌空洞をなすむ。それを形ち肩によくある。
て、端あこと肩骨は、筋を至し。肋骨のれに打ちられ、あこふ
に、又あて、體骨を重ねて、さあゆの肩骨を肩骨の表面に骨を
あせり。アローフ肩のやし。隅角をなすものいへま。ロ
蓋骨めぬ。又、齒は、又、湾む。左、右、蓋骨めぬ
し。小肩骨いくつともなく集まつて、一大肩骨とあるもの
り。又、筋骨りぬし。短骨みて、四きらぎ。右、筋骨積
筋骨累積引一粒をなし。其後堅めありて、や、境面をせ
たるふ。角ふ。又、あづし。脊椎骨、椎根骨、椎根骨めと也。

ちれへ此肩と名づ骨と云もれの所と云ひ
と子え中ニハ稜角と生せざ子ちり所と
たまちや多稜と仰あふよりあれへちうま雜肩と
三掌り形と雑やふよりうてねを足名を
一骨の内ふても其復め立ちふゆきあり
て三復みを専一と堅密肩復耳ニヒ綿骨復そりと
細忙肩負分別と是、腕骨の外表、顎骨の裏、
の肩復みて多掌そりふ肉取あつても一
往み極左弓もゆみて藏るされ左弓とあらづし其れ
唐手なる事一ア大完アタリれウマキ、肉取ふてハ僅
あく立きる之間孔切らきて肉裏ふるをあきらむを
も血脇をやふ、骨へ中央よハ此貞以之をまテモジ、瓦鶴
ヌム足み後ひて角ふうあり、残面と名づべて燭あこ

云々、
うぬ孔をもてち
孔うちあれを則ちあれを體完しそ

骨表を被ふる骨衣云々をめりて、左體宮中より脂りて
其中ようちも志旨と乾枯されど、此をハ腐失してうそ
致端シテ筋肉の根もくわはひの骨衣アラシにて、右骨衣
ハ幼弱ヒトキの時よへ血脈よ量シテ右脇脰ウツコにて、左脇脰シタコ
の細脉ヒメヒをシテ脉謁マツセイハ、通孔スルノ掌ハンドの外表スルリミツにて、肉スル皮スルて中よ
入是長骨スルにれシテその中心ハシナ又髓完中スルニ筋血脈スル口
を接シテ治善ヒツシの筋也、司スル長骨スル之アシグリ正比ヒツビヒセル
之アシグリ坚密ヒツミの骨質スルをシテ其の産血脉スルハ、
是えて骨内スル入れシテ之アシグリ筋着ヒツシと最も密ヒツミをシテ筋
筋弱ヒトキの骨を清シテして骨衣アラシを観スル。それよ薄シテ乾血脉スル
め裏シテす段シテの細脉ヒメヒとくよもと骨面スルの通孔スル中スル入

れ子衣あきて、龍穴を被り也。されどあれを龍衣と云ふ
ゆきは此聲も、又を言ひがち。龍甲は向ふ暗之へ高張係
せられば、又云ふ。又うて、龍穴は掌表の血孔より出でる
云々。又、龍脣は肩表上あると被りて、之に又ある。
あぶつて、ぬ孔より掌裏の血脉枯燥し、ひりもてのち、龍
肉入脂解げて、外表に湯ひ出。信也沖と満りて、又掌のめ
くよよむんゆるはのく内外ちよをさす。高骨の脣
間縫端り、冚縫貯中よき所、又龍脣をもてて赤き膠筋を
墜てゆへり。セワヌスを水に、研磨粉をこし、偉の脂を取
れあり。ゆきを云ふるふか一ハ龍脣は肩表を差す
資之へ云ふれび。脂ハ元トモニテ、其を管と食う。されど
信がち。されど脂肪過盛り等とて、漏洩して、他ニ功
用あり。又手を拂ふにあつて、先づ

そひまへす。まへす。まへす。

脛骨連合を有す、固接、故接の別無し、固接にて連合する所を云
所毫を動かして、胫も一骨なりと膠着する所を云
うの綻接、齒接より而いふ云、故接は、動搖を有する連合不
可云、轉節り軽ハ、取れども、之の筋端とて、有病
れ接にて、あるものあらず、あらひを病弱を接、一筋を
うちをあく、ゆきつゝも、筋端する。軟骨は、神ひるよ
筋筋肉によりて、ちまと連絡されば、その筋へ、動
くべアレ、坐りて、筋よハ、動くへう候ど、されど、筋骨の
筋よそよぐりも、そり一と、草轍、轍筋等を云、其質歟、生織よ
筋を有す、骨頭の筋所よりも生きて、他の骨頭の筋所よりも
筋を輪を被り、かくさまざまり、草轍衣とも云ひ、
大衣の内面を別ち、轍衣と云もひ、而て既に上よ高ヤリと

まづきは運轉自由なるを以し凹凸向くして、その内へ以
ふ骨端の凸凹を永らむハ、残端のみあればゆうあづ
や、自由を節を以よりてあり、さう寫和とは、仰残、左
左残等とも云ひて、之を缺残ともいふ。之は便のとくに
伸筋と筋筋との運動筋筋のうちれども、や、骨端一ハ骨筋
の筋を左、右、一をあれよ、高さをふ凹筋と多くて、中下を自
由筋りとくに、凹端、凸端を合あて、高さをふものあし、其
其反側の轍帶筋生じて左左子筋、うも筋と筋とれば、か
ち筋筋と筋筋をみる。其三は、田旋筋と云、残端田旋を了
め、其四と半筋と云、ひじ筋筋と云、残筋り全をうらざるをも、骨端より筋筋ありて、互に痕貼り、ちほ
うす高く立つれとも、強筋の轍帶もてえふあれと、車筋
それをみたまふ高さうなうねりあらう。

前序

骨端固接して毫毛も動く立れぬる所を残りぬくに凹
窓と窓をもり接する所と程を以て、左右接と云。
左鶲筋筋状と立たせて接す、あれよ鱗筋筋と、左接達
と、右別筋筋と立達、右接達ハ、軟骨もて、之を達筋を立たせ
也、三と軟骨接と云、あま軟骨の高枝にて、骨端のあち
と、立たせと先の軟骨の裏筋よあもて、骨端立達によえ
動く立達しと、つと骨筋の接合、左端の恥骨達陽すと
了所を左、三と轍帶筋と云、立ち、右骨と、左蓋骨と
間すあるのと、其他ハ、鐵筋様轍帶の左骨と、つらぎある
とうら、而の轍帶の所よくよ後ひて、軟骨接の立あらべ
し、四と針筋筋と云、立ち、轍筋の頸骨よ筋筋を筋すて、左
骨筋を論立よ、坐筋立よ、左蓋筋様轍筋して

院中披麻は子名布をふるひて河錦貯めに骨もぢりて
こう、ふ小笠の所と並んで登殿を一ちめあつた。そぞ
小笠のちりハ一柄あらまうきを二千石の一列印より
細えを六千石の一列印うちも長官と権利にてありて稀
壊破よ難く。そのかう星をと集ひ透けてありて小
笠翁よ雪を詠る松の家にきて。そとあひゆれを小
笠ハ四袖となりてあれよ衣りにふうとくよそろつぬ
る。その雪を衣と。よく見る時はお、厚く數層よあうほど
雪をハ四層雪をハ十層とも重てね所がし。その一層よ
刹瓦ふきのせとあるよ。レテ純一の無傳物よりて
はうよ百う十石の一列印うちもニ百立十石の一列印よ
て。宝庫の雪杖とぞなれ。もめあきをあれを宝管御掌
とぞなふ。あら雪室よ包みれをふ。小笠の心くつとも

多く裏毛をもと至るに散雪の室もて包まればるち字
り全體をもとせし者あり承ふ様はあらざ小竹もえ
たる處外を外面より口をへりて内へ體内より出
立め雪落つゝつともなく變り立ふ雪室より起きて掌
傳うるよしものすそり取ふ雪室の間をもとめ雪室よ
頭微鏡にて見ふ小核のつゝもなくも布正の傍を
ハ因く丸を横図にて四支よ沿ひて湾をえま枝を生む
るやのよ毛立青玉内室にて汗を空毛日光を倒すとふ
より一てこれを結露ぬれやく白け毛と母頭中どり毛
して亞ヌシれを灰白色もろきもくちうく堵破より下
て核毛よ初めとくよ立ちて瓶着をふ冒ひと鮮一毛れ
を透けて立毛枝の端へ他核の核端と接して毛根に
管せ細めゆくみを立毛がし側と他核の毛根によ

氣に侵されて病瘡ありふれりあれと母ち角と鋸きふ
を刮すハ瘡ヲサ、瘡をハ瘻つて竟えらるゝもな
ふう足四五日やもとるの間持つて骨尾めがみよ筋子
毛高き田舎町りむるゝにて創瘡は骨轉をほせありよ、傷ひ
柱と同うて石をも塗去れと耳、そは傷石をうさるさるもす
あともうと骨筋ふも端力をも仰へてふせのりうるこ、
肩面と被つふあめ筋せらるゝ。また肩面所くあひ
て、そり所よもや筋も筋端トれざれも又骨の筋端
もをと小笠うぢて滑るまよテ、亦骨の筋端
病して狹あきや、其他眼瞼を狭められ、眼窓骨瞼を祝神
至瘡止むを、神至祝瘡あむ、火脛のをめよ、火脛うどし汗毛骨
火脛も火脛も、後すに傷ひもこりゆく、火脛を火脛
火脛一で傷ひゆうらさふせを、火脛ありゆ、火脛を火脛

を宣の性と端力西あまてあら障ちふよりりて吸收り様
かうてもあめ書形を写せのり是れ形るにうちを旨便り
到えあえを極す極ゑゆめ潤合す五系を五かわせす
一す稀ゆりきれりけも脆くして破砾一あくも一
稀ゆりき宣教官まれも破砾か裏ありや重系
用玉磑うるうんあふりくらひもま一ます先四
と三ちう下へぞよそせろ四十ニセキカモテ破砾と
きりを剖系との度ニ高きととて立多シてよす一よ四
ハ洞き三百四丁セキ高きよて鎧砾と一鉢をそり一よ四
ちうう百四十八セキうちうふもて碎く草くら
よ打て骨筋を漏れをきき長骨を立角く浮力を保つ
形子薄けても打て立角く筋骨を立角く筋骨を立
、う臺ひかまう引く、お玉物骨りとさを長くして倒る

ヨリノアニ二月の節と候て、先ニ化掌一筋前ひより、豌豆
掌を以て之をくいて、オハ日おもとオ十二月の後みゆりさ
れを以て化骨頭を取あそせたるを高骨と云ふ。此鳥一つ
は三ニ之をもつて、短掌を備ニ一鳥それと、其骨は大
抵三鳥をもつて、その一鳥を中央に生ニ、二鳥をあ端に
生一て、此あらそ破りをやむにあ。

骨復をされと母接一筋、其者にてとあるあうと生
志うぢちふ所の後ひ接しをすと、掌の生れふ理ある事
うぢづ、巧毛をち端へを而り血滲れめて、そと被つる
内筋うて滲じるをとく、鳥肉によ變る子後ひて、生毛
吃ふ、鴉うき滲出物と變あり也。此物を骨衣、骨能り茎
の血物うそ滲出を考らえう、ふわのニ週うそ三週を
經一うて、骨復又化前して、巧端を互に撫念をもあす。

あきと肩ゑと云うふ初を接不堅うとさせと母接一
筋くよ後ひて、膠もて生えぬふらとハ、接うくうふを
しづきと骨肉ト體を至るふるいありと、幸あれば、骨子
のモ骨肉の吸收様り乞く禽に起きて、右端の體を復し
毛をあふる所を以て、体内うても而孫子風一て、肉の骨子
化毛あらもの多きあらりと、左骨筋をみて、骨復と化す
れを以て他所謂化骨をうちものと、右骨の骨復と化す
るをうりと骨子と呼ぶ。高脇、脇角、皮甲、臍核の他骨子
のモ、其れもす端ゆきりくくと見ゆる肉と漏出也。此も
是れの骨筋をもくと、左骨の化石所復と云ふと申て
よりれ

瓶膜

瓶膜人眞を血脉と神至と子旨め不難言よとぞとて

人禮の外部ニ口元をもぎ内面を被へ不勝大るそ
ありふるをめ事也トモ色立ふ様め内面ヲモ被モリシモ
トモモリキを妙皮也之に接めシテ引が引フ外皮モ裏也之に接
モキナニモ引もれビ自ら一程内締縫をあせシテ之を
志ム云モ德ララシニ外皮ニ接ムをあるニムヒテ之を
キモト暖め本唐ハ主質メシ貯ムテ之の妙画也を締縫滅
ヘ雲々而テ則ち接面乞ムアリシ内面也ハ角房識ノ一
毫也ナシ也角房也正しくて其間甲子放至ト外面ノ締縫
也モ外子骨深め吊頭也締縫也活錠也之を祐連也モモアシ
祐膜也内子馬也子キム也モ有モ活縫也之也
蒙也モこれも角房也之モ抑やリれて
うでゆテ頭微鏡下モシモニ見經子神也モ引捺め枝
をかて不枝子枝てめしらにうみられど尼ツサシ仲

の結果、瓶膜の大約よりて部類はうなぎの巻殻と立ち
てあればを名呼すのであれど詳説を省く。不よりて瓶膜
ト巣をふる惟臺は、言道よりみて、いちく登高をれど其
町にて、刀にて刺さり、多く至し、五陽より端より深き瓶膜
ノ而確當に穿り、うて玉雲うきて、瑠璃を剥むかる處のと
くある所へれり、ゆゑを瓶膜よきと五面にうちて一枚、放面
にし、一々擧画もと放面とを一層の角値に到りて放生
を云、擧画も皆微細にて、他、毫忽極也。軒形と云ふ
れど、瓶膜の廣度を以て被ふれど、其を狭量より比て走と云ふ、
筋神全以て互く附着して裏ひやまし、裏や立ち流れとも浮
力が立たず、又、引坐端めにとの表面に皺紋を有す
也、大皺紋の外、又、皺縫を有す、皺縫を茎以て、
膨張を生じ、之をもつて放面もを至る。

凹凸ありて、その凹平と並起ふをフロフキ。一言云、凹平。又
大小併せて中止を歎微鏡をうて見るとき、瓶をもりしる。
かう瓶核られよもくあーくを合端すて立登ーたうて
瓶膜の経と別きハオーを消化黒味吸黑の瓶膜經と至
しオニを灰を鳴きめ瓶膜經と至シオニを胸の瓶膜經
ノ而至る。

粘膜の著一と用を瓶汁と派出する所ある。此汁を得瓶
核より出るのを多種を瓶膜の全面うちも滲みゆきて
粘核より出却て他汁を漏出をキメラム。也を胃核。核で
而一く證を立し而瓶汁を云むれを嘔物の難い事にて
れ毛ちり毛毛水と角毛瓶化之との所と不ずして另物
を難い事ものあ是をうつを呼吸黑すてを痰汁。嘔物
にてハ海仰れり故れふや半難物をうめしも一。瓶膜の

様なされあう破衝を病あはふを。瓶汁と體球を難りふ
と最もしれりそ瓶膜の外面をえきよて外傷を蒙く子
供より子瓶汁を元白にて瓶膠繕めぬし此もの大氣子
感にてその所にて立ち下僕と要其所あり。彼の鼻内
にて毛を立し。鼻子感して子極ちあも漏出を量多く毛
ち林病をちよて。瓶汁といふく傳し。もういち寒冒とな
るて稀汗といふく向毛。あらん毛生壁既よ出毛。瓶汁
所謂瘡を云せり。と云ふ。元白の少塊にて水うも主に
法にて解けを。簡易ノ子瓶核も。毛の多毛。瓶膜の覺痛を
所より瓶膜も。毛産出も。一種の難物を多毛。瓶汁と化學の
所により。起毛する所。瓶膜ハ。永確子解れて毛を減
てりみ起毛する所。瓶膜ハ。永確子解れて毛を減

と壁や正陽の祐液を且汁を觸れてもかきの様と覺せ
てありふべき事のけを眼中に見ゆきを以て劇と之痛と
爲ひは、もうちよとてよそも脳髄脊髓の神全消る祐殿より
ハ覺極量はげり起れど之筋骨申すの源氣既至ても未
う劇しうをりきハ嚙碎立を爲含物ハ口内喉歌^{ヨリ}也
立る弓ハ弓毛と脳神又是にふの故より各とあきと知
りと母腸や又もやてそばと知り遂て多くし筋申ツカ
ら筋神筋の主事立ふ所立れハ立れ立り、不覚様も立
て門口立ちて号^號せば五もの立よ向むよう立て
覚様と起るもの立よ、仰め喉歌と化と立よ嘔うたく
て、剝咳と起一也うちも之氣立ふを久しく傳れて立ゆる
行子立よ立よもの立よ、立氣立よ獨劔と剝咳と
立よ立よ、立氣立よ獨劔と剝咳と

古事記傳
高支
ノミト
馬ムウル
シ

田母高乃ふせを吉上 トちまひ跡あし、鼻内の粘膜寒氣
也ハ子モハ眼の粘膜あらもと動リ、膀胱よ石を括フハ
尿器の粘膜瘻と生る、腸中ニ出を生じて是を鼻エ創ス、
うぬえと寢へ嘔を發し便丸粒並石を起し、し、差粘
膜の一筋缺ケテ失れ、叶ハモカサケルを計ト和め
おきて、もどりとくよ修膳を呈し、差附けキハ瘢痕組織
を起する所と補立、のに傷・潰瘍の計アレ、
至ちらき等も見えて、久死、身思・池性・潰瘍のありて、
守松識の水腫ユ以て、ふも、めあて補し、後之敷起り
瘻生じるも、も之をヒル。曰、粘膜の功司今、すも、
命を失はうべくして、又は、うらさるつ事、も、そを
空氣不觸子、粘膜をそめも肺中不有みて血を破化セ

あり鮮紅色とほほえぬ物をもさへふ印司
至うふまゝうに筋膜ハ黒色もよしてまた弔る事多有りし
其腹血脉又筋膜をもて鮮紅色之へあへうり也れすと
白黒の筋膜又血脉の汚る所ハ因しけりき事も中毫中
の筋膜のめくは其色の鮮紅色をもたらし而毛も筋膜
ハ空氣よふれていたる鮮紅色をもつてゐる所也
門口、車道の門口に喇叭皮をもつてこれも最也
鮮紅色をもつて元白主な筋膜も空氣よ觸る
ト乃ひて鮮紅色をもつてゐる事多有り虹脱、陰脱乃ひ人達虹
門あてちまきり澄むへ云々

腺經

禰々と引かれて孕められた臍の血を流して
汗をかく事無く、一端う形うど元氣で

汁とぬめり胞みを口ひるみて嘴の漏蔓不擣毛れあり
あきられと頸胞コルビスと云ふ口もくもて其内とぬまふけり
漏子レウケをもく漢ハシてはれぬれもみまよら、る草
一の莖泡カキバブを蟲ムカシも妄腹ムカシの莖衣原屋カキバブとあるて莖草カキバブの漏蔓
り至れと則ち纖ヒナ佳ヒツヂの貞モリ化ハルをねうそ漏蔓カキバブの莖カキバブよ
あて岐カギをかうとふものとを莖膚カキバブと云ふ者一莖カキバブ中
い是カキバブて周圍カキバブは腺泡カキバブの連絡カキバブし汗カキバブとの莖中カキバブを以て
莖膚カキバブを顆粒カキバブは小葡萄カキバブは腺カキバブもよりつな
頭微鏡カキバブよりとそれを覗カキバブうとし顆粒カキバブは腺カキバブもよりつな
子者らカキバブに漏蔓カキバブ一莖カキバブにて別カキバブは枝カキバブを別カキバブとするもの
焉是カキバブ皮裏カキバブの賦校カキバブ眼カキバブ中の瓶校カキバブのりくら、ふまつ莖カキバブに
一つカキバブもなく集カキバブて陰カキバブも体カキバブの枝カキバブを分カキバブふとくす獨立カキバブ
色カキバブは莖カキバブたまカキバブ者カキバブも多カキバブも少カキバブとめあつまう、而時

おき筋カキバブ回カキバブて因カキバブて因カキバブ漏カキバブをふもカキバブのりあきカキバブおき筋カキバブつまきり
て形カキバブをうしカキバブあらゆカキバブやれて縱カキバブ、よ筋カキバブ、筋カキバブを移カキバブをきぢ
別子筋カキバブ繊織カキバブ海カキバブ繊織カキバブ水膜繊カキバブの若カキバブて外表カキバブを包カキバブ筋カキバブの
臺カキバブをうち者カキバブもその内子色カキバブを漏カキバブを循カキバブ繊織カキバブ主枝カキバブと
是カキバブ漏カキバブ筋織カキバブの雜カキバブへきて枝末カキバブとて以カキバブをあれふ地カキバブと
て血脉カキバブを通カキバブしとめられて、るち縫カキバブ織復カキバブと云カキバブし、ふよそ
3もめの肉カキバブを厚カキバブ、
表面漏カキバブ筋カキバブをあもカキバブのを一和カキバブ筋カキバブ
積カキバブ脳カキバブて累カキバブて筋カキバブを筋カキバブ入カキバブての入カキバブあれちカキバブ筋カキバブ
凹カキバブをうしカキバブあら入カキバブて筋カキバブ筋カキバブの正カキバブうれてす最カキバブの細胞カキバブ
乳カキバブを漏カキバブ筋カキバブの枝カキバブへきて互カキバブ端網カキバブとくすで
乱カキバブをふされはる中カキバブを而後カキバブをれりと生カキバブ筋カキバブよ高カキバブしてか
心カキバブ汁カキバブを莖カキバブとふ唾液カキバブ且カキバブ胃汁カキバブをうきとまひき取カキバブ

校へ入る水校のまを以みるふれうて浴あり、ひもぐ知
了是うをも神至もあうとてめわりをあれ詫し校入
入る神至を多くを血脉に連行したのづのト叢と
て湯草を國むちれを腎臍肝肺よりてを血脉と接志
て是り、噬校もとを湯草子接りて是りを、胸の腸脊
神至よりかう、ありあ是、若神至より是ふもかみを校
の湯草の端一を外皮ニ口と接し、六七社膜口と接志
て唇も心汗と其所は以て、校の湯草を他端ハ敷
岐よかく、之を心も絶て毛脉も口を接せざふキ
の是を、これを耳端の終止する三枚あり、一を肩裏を
引いて、つりを、一を耳端移更うりて胞状を立つを、一
ハ他校や端口と接して細筋を立つて終りを中止す
を、一うよ其内質を知りうるを候是を肝肺のめし、湯草

トモ、そり枝末はふるうて内面はもみる角房あまて、元
到と大茎を放膾をり是、少枝を備え一管うて被いた
れかそ校へ種毛を下るふを、ち形と湯草の端をうむて
を立、これらをられを至校合校の二種子大別するそ
う紀草校とを、至一のり夏、あうひを少胞みて更にあれ
をかきハ、一を直側校とし、もう肝校耳臍校子官社膜子
あう校ベアシ子校リ、ベルキニ・セ校ヘとしニを育泡
校レ云、うをうお社識の一房より立是、内子を角房豆
到立、是豆の胞豆と、一箇獨生豆ふその豆豆豆豆豆豆
豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆
豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆
豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆豆
ケルス腸のヘ、卫ルセ校のとし、向左根、咽喉の大胞校

扁核梗中子す累積互不ルリナルスも亦此毛豆ふ
へし三毛至葡萄核と云此を湯豆一ノリにて引出ちざ
れも亦多々小胞りれと因して連浸互核より互り核
核藏核黒弱謾核へりし全核とを自ら一經ひるをもの
みて湯豆並吸とおち性端ふを胎と達ねる事の何とく
毛豆胞肉う矣をふすを陰も葡萄の一房りめくらん
元や豆子あらひを被端互ニ口を接して細狀をなし
細狀へと毛膜更して高モ虧障多きりとくは多く毛豆
豆子葡萄核とある核を互換り相集りて累積互うや
らすみうひを累積核と云申れりも理な一ウシヘウ
ヒ今核と更ニふれを一ひ累積核と云歎毛豆とて互
れもも豆子一葉と子穀粒胞一源と互しられももり
もてうの核乳核漏核りしり毛豆一絆の核豆近多ひ

換豆莢合し毛豆殼に合て毛豆一大而豆莢當豆子あれ
と樹木子前ふる毛胞を差りて核と申て毛豆子を毛豆
合て大核と互そ幹のあれを統るがとし申子を失ふ
り毛豆て湯豆數核各々生毛豆子の内毛豆核漏核と
則ち内毛豆子ニ毛豆核と云ひ毛豆子の内毛豆核漏核
毛豆核と毛豆子毛豆核とそれ毛豆子毛豆子毛豆
てふく豆子豆子豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆
毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆
核と云毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆
副母相授水脉核と毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子
え毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆

血毛豆資りて新汁と製毛豆核と云毛豆
別され豆子汁と湯豆子毛豆子毛豆子毛豆子毛豆子

山と和云あるをちへての通氣をきこするよ別れ
て、血より汗汁と製衣それともその脳脊髄をもって血中より
ふさふもありぬあらむに汗別れ云うとよへも男精を異なふ
て製衣をさかぬ、めし血中よりつて混れたり物を核より
て汗別れをぬ出ト云うとよへと且汗弱あめとしきう年
別れをせ理ひるともそへからしてうと一體め故血より
をねのづうとふ汗の様に傳へ又血中より汗汁を漏出
其汗の内より汗液の分より汗をろち生活にて更原を
まよゆきぬる汗をふを脉壁の透き透る度をもてちるくも
汗をへし、汗を給生りゆく先よもうの透出様にて血
中より含める汗がの脉壁を透出するよて汗を立えを起
し、ぬきを分汗を滞せむるを、ふ脉壁を透出せし汗の
往々透入云極りて、精良胞の壁面を透入して又

の結構を解いて其の如き所以と云ふところはこれを
考へて嘗る所が爲り故にうろこを剥れを喫候
乳板はその結構を元るは相同してまことに漏
出を汁を相呴されたりまゝハントンレコートンルの登場よ
云らく核皮の内面より到る角房ハ、勿論汁も心を
く感得するなりして漏もされちる汗の肉も入りて
其房室をさかむ極めて破れ漏度よ漏出する事
ち特性めけど而多く云ひ乍り程あつたを云ひし
引きを肝臓みて且汀を剥皮するをうめ肝房と云所より
り是れ化して核皮の裏面を透する所よ、血水の化する所
最も怪しきからしてえも云うなし称血多中昏多病多
て以て之を含めると云うも一且透するもありてを猶も

をかねて身あり量を以て感するものあるもあらむ
と御あるを食ひまくそをもあらむと云ひ
ゆけの源を有する理ハ一をゆく所より傳へる事
ゆふに自衍め理によると一をすすりて能くもあ
を歎微鏡の力也修習め証驗とすうて治れる所も
體鏡、鶴鏡、精鏡を刺衡す感もて叶利し、特鶴、精機の驚異
をすき落とせり、ちきも骨窓、す羽も核ハ一も筋
りもみよあれを因れふぬを、かか御機をうながすて、そめ
御稿なると、ト核と歸し、ゆ出を促すものあま、壁核の囁
ありて、體さき、陽核の躰部核にて體さく、
あきあるとて知る立し滿多の量銘りよ仰りけると、湾を
了之、其汗をぬる、湯かく、
湾れるを行ひぬれよ便すして、五湯とえりうるも

之早うあつし件の汗子種こあらうて、体内ノ用をあらま
ふもの阿モられと極地物と云、潤汗れとし、高利と多き
ふろてめ弟ふきの阿モ引つてあきをも潤ぬる事そり
用を体中ニ引きものあり、体外ニ引きものあり、空汗
胃汗を、体中ニ引きものありて、乳汗、精汗を体外ニ引き物
引り、又ス廢用有合にてめ弟ふ汗けある、體汗引ちられ
多モ用ひる所を、体中引て用ひ更に他を廢せらる、か
クシ且汗ハルス多、多、多、多、便ニ難ありて、排泄を
ら多きと、用物を少陽は除て、海化の様を易ケ、得ヒ吸
取せらる、拘多是核の結構無ハ、多モて此より發を
る生機も以ヒ効能有シ、シモ而一化育の要焉有シと
之あふ多々有りやつし、然して、死生生きて、うち死する
うて五穀を保存するを此意がるよう死して、生と活

嗣を汚す事あらざるを、も若肾氣、或寒瘓やれへ而死
を免うれを肺脇の蒸やめ、空氣を免うれを、りきわみあ
罪を生むき生を殖するに到ら、しきそり肺の病ある
よもよてあらるるを、もし在敷生の星、一星而め
鳥一鳥のよばれて、其用をすらるるを、より害カナリ、重くもよ
りる立

今少く活を病ひる者、一と例れり性を量とへ、血性を
て、その漏出を爲り、皆瘡とる事傷を多めあり、体内に
て、皆瘡りたるを、例らるゝ事あり故ニ、因物を、血出を、少
い方を、むだらうて、血中ニぬれ、ゆきゆき、血
を、そく物を、血汗中ニ以て至る、それを一枚取りて、少
故ニ、うる、多孔瘡を生じ、それより、血出を、既全きより
止めて、血中ニ瘡立、病候潤らぬあるありて、甚い瀰れ

3きのを弱りて、凶出一せつし、自家内れを加え、之を離す
ぞちよ軽れて、うそ血水稀りきもいやもと透出、透入の様
易みる事し、されば血便を稀らるる事、の温水を多く
飲み浴を行ふ事も、心を進む程ゆめあう、かくて
増れる凶けよ、汗一そやを含まざるを自幼り泥多る
至し、差所多く流れ、水汁を多く漏る事も、血中も
水を減らす事も、心の極端まで、避け甲子因物をもむれ
立く含む事も、汗以をく薄れて、餘あり、渺渺とあら
ハ、溺水濃さうてある事し、アニモ核内に入るを脈の反
寢大、小、倦怠よ、心の筋を保つる事も、之も、も
脉多リきを、凶の資をうる血量を多く入る事、而より
度早く後りて、激迫の力強きをも、ももを膨太
アキモ、足核よ、凶別せらる、汗もれひうる、し、若毛

脉の量少、停りそれを、其中を赤色する血行も、永くして
その透出する事を、體力の消耗するからそれを補ふる、核
腹の血脉をえーきおり、罩膜も、撫摸核のとえを凶別の様
を裏も、厚らを、血脉を留める核、肝、脾、肾、膀胱核を凶けと
糞を正と最もし、にうそ核中に入る、肺胞血を、みる用に
きりうる、そめ激迫の事、芳核あめの、カ（も）は
性の物を凶別を了ゆへ、次に肺胞血を立たし、核も、凶
了肺胞の立ちりを、膏肉を青い、血の肺胞は、立つて及
びて、それからさうと神経も、膏肉も、と給え、立つて、
と血中も、立つて、其他は、又立ち、走り立つて、立ち肺胞等
の肺病と接さんとを教示する、ありて、肺血を肺核生葉
混一をうゆる、因性うそには立たる、あれを凶別す

あま血を赤脉血のくき体アキとみ至ても、且汗を制シテる。よ、肺形血要らるうと、オニハ神至淫の感鳥アヒニアヒて、心の極アヒトアヒあらふ精神の感傷、神淫の疾病アヒハ、胸汁アヒの星と感アヒトアヒ性を要アヒトアヒ云アヒトアヒハ、日常妄騒アヒする所アヒて、あやもも足アヒさるうとアヒモ、乳母精神を傷アヒハ、乳性を害アヒシ、少兒アヒられとアヒめを、痰痛アヒをアヒし、下利アヒを、麁アヒをアヒせし、情アヒをアヒを、腰アヒをアヒれを、酒水アヒをアヒし、言アヒをアヒつせ、火アヒをアヒし、情アヒをアヒけとアヒせし、禮アヒみをアヒ神アヒをアヒ感動アヒハ、傷アヒりとアヒハ、ちうし、高アヒの神至感傷アヒは、身アヒの候アヒをアヒ動アヒうし、骨アヒをアヒ動アヒうし、肝アヒをアヒ動アヒうし、臺校アヒをアヒ動アヒうし、臺アヒをアヒ増アヒり、血アヒをアヒ中アヒトアヒ締アヒれるアルエルアヒ、内アヒチアヒ子アヒも、臺校アヒをアヒ動アヒうし、が故アヒなるへして、モ高ミアヒ神

至校廻アヒトアヒ歩アヒきて、その胎壁アヒハ、透出アヒ入アヒの様アヒをアヒとアヒて、觀れアヒハ、云アヒ神至の感郭アヒハ、係アヒるトアヒハ、寛宣アヒすアヒとアヒ、云アヒ立アヒし、能アヒ神至アヒその稱アヒを、核肉アヒとアヒり、そアヒ内アヒみアヒまで、自アヒら能アヒ神至アヒ、中心アヒをアヒもアヒむアヒか、已アヒむアヒるアヒ、云アヒ立アヒて、能アヒ神至アヒ云アヒうアヒとアヒ、腸脊アヒの五體アヒをアヒ透アヒいアヒける子アヒ、心アヒの量アヒを、極アヒとアヒ云アヒうアヒとアヒ、核肉アヒの全アヒく漏アヒえアヒざるよアヒて、透アヒき立アヒたアヒうアヒとアヒ、うちハ、水アヒをアヒ之アヒげつ登アヒり、力アヒをアヒ透アヒ過アヒするもの形アヒをアヒ、且アヒ汗アヒをアヒ生アヒらアヒすアヒ時アヒも、透アヒ出アヒの理アヒをアヒもアヒて、めれアヒるアヒ、汗アヒきアヒとアヒ母アヒ死アヒをアヒれアヒをアヒ立アヒすアヒ、周围アヒをアヒ透アヒ出アヒるアヒ、腹膜アヒ、腸膜アヒ、網膜アヒをアヒ黄角アヒとアヒ、衛アヒをアヒ刺アヒ術アヒとアヒ、乳母アヒ血アヒ核肉アヒをアヒ透アヒ出アヒし、乳母アヒ血アヒ核肉アヒをアヒ透アヒ出アヒすアヒ。

脉凝血り爲不産塞をられて、その候必別の様鳥を、此等
不當もて若様母より候り他而あもみどりを、それより
子て必別の様鳥を、或まるへー、若さるきするを必別
へテ汁り全え子並満らし、肝臓ありて且汗の製造
支ハるを何とて、おもうをされハ、血ト足出る詰毒汁中
よ、且汁へ多分和して全え力経緯中ろ海玉の薬物を
ぞ助くる、隨れ必別候らう、其もその帰る所より
きハ汗ニ初一、向き血水子混あて胞腔^{ヒツヤウ}を、高瀬モ爾臭
と薰經^{スル}て、隨^フ之の肉子含り^リを否あもつし、ねすそ
一鳥め必別^{モカ}ハ、一鳥め必別ハ減をされを互逆の極
ムホ云形る陽^ハ、必別^{モカ}下利を蟲それハ、既汁^ハ
必別^{モカ}、完汗淋漓^{スル}をもてあれを、濁水の利を^{スル}か^シ、
高峰窓縫中子水を滲^ムして、水腫^{シテ}云病を生むる子利

解剖^ハを同りて、之が利する事のみ多く^{アリ}を後て水腫
の感^ハるやきを、必別の上^ハあまく、あるの必別^{モカ}子、及
遂^ハち^ト行ひ、必別^{モカ}を産^ス章^スする主^ハは、其^モ立
ハ、傍^ハ立^ス敷^ス技^ハうれちるあり、津^ハの胞^子於^テの^モ物^ハ
必別^{モカ}子^ハり^ス、枝葉^ハ葉^ハ面^ハ、益^ク也^ト必別^{モカ}の様^ハ
左^ハ至^ムま^リ、あう必別^{モカ}子^ハ、其^モ内^ハを^{アリ}する
右^ハに^テ、是^ハう^ト調^ハ裏^{モカ}、禍^{モカ}を^{アリ}生^ム必別^{モカ}子^ハ
以^ハ空^ス、知^ス立^ス、冒^ハ脣^ハの解剖^{モカ}子^ハ必別^{モカ}子^ハ
ハ、解^スモ^リ、解^スモ^リ、モ^リ總^スモ^リ、下^ハ脣^ハ從^リて、所^ハ下^ハ濃
く^ハ乳^{モカ}、而^ハ男^{モカ}を罩^スモ^リ中^ハ子^ハて、も^リ脣^ハて、う^{モカ}精^{モカ}云
モ^リハ、抱^スて、入^ス、も^リ、あ^リ、て、精^{モカ}入^ス、も^リ、
リ^ハ、重^{モカ}禍^{モカ}を^{アリ}、日^ハ夜^ハ抱^ス、^{モカ}必別^{モカ}子^ハ
解^スモ^リ、^{モカ}あれ^ハ、統^ス、^{モカ}解^スモ^リ、^{モカ}解^スモ^リ、^{モカ}解^スモ^リ

あまを嘗みふらすを起し、痰囊（たんのう）の方、渴（く）ても先づて汗
を出する者（もの）を亦を嘔（え）や、少（すこ）吸（く）取（と）る爲様と仰（あお）つて汗
を水をとて呑（の）ひてあるらき（らき）は物をかきふらむり何事、膽
脣（たんのう）、脣囊（のうのう）、脣腔（のうこう）の事ハ、則ち是ももも少（すこ）利（り）きもすけり久
く渴（く）きりあはせを、而も汗液（かねつ）の内（うち）を立ちて復（か）た物を
細剤（さいざい）と能（の）りをあらざる事あり、させも、ち権全（ぜん）に鳥生
られこと前と稀（まれ）なるとおちま（ま）、ち権亦と渴（く）子、とめ
事多くもへ立ま（ま）、ちきを便全（ぜん）に用（もち）ふてハ、情觸（じゆつ）を尋（たず）ね
る時（とき）からさも、ハ鳥生立（たつ）、ちきをふ接（せつ）を取（と）きしやうて
は、初（はじ）を最効（さいこう）とすれど、そのちくくよ後（あと）にて悔（く）くよ
校（こう）へ瑞（みずゑ）あらわ、汗（か）の跡（あと）を取（と）り、そり性ニ二種（しゆ）りと一を刺
術（じゆ）よりうして起る、一をその部の脣囊（のうのう）よりうして起る、ちき

之候度の麻痺（まひ）と云、その刺傷（さしおう）よりあらむのち、汗（か）の調合
より立ちて寒（さむ）いをあら、また、寒（さむ）い、寒（さむ）い、寒（さむ）いを水
をと量多く含（こ）むもの多まられハ皮膚囊（ひふのう）よりて如汗
腺（せん）、中（なか）にハ、この負溝（ふこう）にて水をぬし、而も汗（か）一て漏出
し汗液（かねつ）、空瓶（くうびん）ハ、固而か多くて水を量多く含（こ）むもの多
く、不病不勞癆（ふびやふらうび）、亦、血調（けいちょう）をもふ病を含（こ）むれハ、瓶泄
物量多くて、立ち、水をとく汗液（かねつ）を多く、而も肺
肺勞（ひらう）を患つて、全汗液（かねつ）をもハ、海耗不利、清耗無所

齊東野語卷之四



